

ヒアリング調査による多機能複合拠点の働き手及び雇用者からみた特徴
—郊外住宅地における多機能複合拠点の可能性に関する研究 その1—

正会員 佐々木駿 1*
同 小林史奈 2**
同 小林秀樹 3***

多機能複合拠点 団地再生 複合施設
郊外団地 複合化 公共賃貸住宅

1. 序論

1-1. 研究背景

高度経済成長期以降を中心に開発された郊外住宅地では、居住者の高齢化や人口減少に伴い、高齢者の単身世帯数の増加や孤独死、子育て世帯の孤立といった問題が顕在化している。そこで多世代が交流・共生し、住み慣れた地域に住み続けるための医療・福祉・保育等の拠点整備が必要であると考えられる。本研究は、多機能複合拠点導入の効果を「働き手」の視点に着目して検証することで、その有用性や問題点、今後のあり方を探り、郊外地域再生の一助となることを目的とする。

1-2. 本研究の位置付けと目的

前報(2016)では¹⁾、「生活クラブいなげビレッジ虹と風(以下:いなげビレッジ)」の働き手へのアンケート調査を実施し、施設利用・事業者間の連携・働き手の地域貢献意識の向上といった観点から多機能複合拠点の意義を検証した。本報では、前稿の結果を補強するために雇用者への詳細ヒアリング調査結果を分析する。

1-3. 用語の定義及び多機能複合拠点の可能性

本研究における多機能複合拠点は、デイサービス等の高齢者施設、保育所等の子育て施設、スーパーや診療所、多目的スペース等の生活支援施設など、多世代が利用できる機能が同一敷地内に併設している施設のことを指す。多機能複合拠点は、大型商業施設が進出する郊外住宅地において多世代が様々なサービスを併用することにより小売店舗の成立要因になると考えられる。また、世帯の孤立が進行する地域の交流促進が期待できる。

2. 調査概要及び調査対象事例

いなげビレッジ従業員のうち調査協力の得られた4名、雇用者13名に対しヒアリング調査を実施した(表1, 2, 3)。なお、2011年7月に開設したいなげビレッジでは、開設当初より季節ごとのイベントである「虹と風のマルシェ」などが開催され、診療所や子育て支援施設、買い物施設等が複合している(表4, 5)。

表2 事業者代表者への調査概要

事業所名	ケアプランセンター	ショートステイ	サポートハウス	定期巡回ステーション	訪問看護ステーション	訪問介護ステーション
事業概要	介護認定の申請代行、ケアプラン作成など	短期入所(全20室)	サービス付き高齢者向け住宅	定期巡回・随時対応型訪問	訪問看護サービス	ホームヘルプ
調査日	11月25日	11月24日	10月10日	10月10日	10月18日	10月10日
事業所名	デイサービス	児童デイサービス	診療所	VAIC-CCI	ボナビティ	デポー園生
事業概要	食事・入浴介助、レク	障がいのある児童のためのデイサービス	外来診療・訪問診療・健康相談	相談事業/見守り・生活支援/親子広場/子どもの一時預かり/子どもの放課後の居場所など	お弁当の製造・販売・宅配	食材や雑貨の販売
調査日	10月12日	10月13日	11月30日	11月22日	10月24日	10月25日

表1 調査概要

	従業員	雇用者
方法	ヒアリング調査	ヒアリング調査
期間	2016.10.24-11.25	2016.10.10-12.18
対象者	4名	事業者代表者12名、施設代表者1名

表3 調査対象者基礎情報

	女性A	女性B	女性C	女性D
年代・性別	60代以上・女性	50代・女性	20代・女性	30代・女性
	生協スーパー	生協スーパー	ショートステイ	居宅介護支援
活動開始年	2年前から	オープン前から	1年半前から	1年前から(法人自体は9年目)
勤務頻度	週2~4日	週5日以上	週5日以上(月間平均)	週5日以上
居住地	稲毛区園生町	千葉市若葉区	千葉市稲毛区	千葉市稲毛区
家族構成	独居	本人+子ひとり	本人+両親+孫+祖母	独居

表4 調査対象事例基礎情報

生活クラブいなげビレッジ虹と風	
開設年/立地/配置図	フロア構成
2011年7月 千葉市稲毛区 稲毛駅より徒歩15分	<p>①生活クラブの村 サービス付き高齢者向け住宅 3階 短期入所生活介護(ショートステイ) 2階 デイサービス/訪問介護/訪問看護/居宅介護支援/定期巡回サービス 1階 児童デイサービス/診療所</p> <p>②NPO法人VAIC-CCI ③アークス・レクティブ ④生活クラブ虹の街</p> <p>⑤子どもの一時預かり生活相談窓口 2階 ⑥地域交流スペース・配食サービス 4階 ⑦生協スーパー・配達サービス ⑧福祉用具貸与展示 1階</p>

表5 「いなげビレッジ」イベント・企画概要

イベント・企画名称	企画内容
虹と風のマルシェ	GP園生の公園を利用し、年4回季節のイベントを開催。6月にはキャンセルナイトなど。
心安心支援	買い物バス 風の村主体で、いなげビレッジと他2か所のバス停、稲毛区や美浜区にある大型商業施設を周遊する買い物支援サービス。 サロン 風の村主体で、茶話会や体操等の企画をGP園生の集会所で開催している。
地域交流事業「あみこ」	人と人が出会う場の企画運営。定例企画としてデジカメ教室や絵手紙教室など。

3. 働き手からみた多機能複合拠点の特徴

3-1. 居住地と活動開始のきっかけ

4名とも千葉市内に居住しており、60代以上の女性Aと幼少期より稲毛区居住の女性Cは「近いから」という理由で活動を開始した。また、女性Aは「人とのつながりが欲しかった」、女性C・Dは「いなげビレッジの理念等に共感」など、年齢によりきっかけは様々である。

3-2. 満足点と不満点

満足点として女性Cは「厨房の方との世間話」、「イベントを通じて地元の人と交流があり、施設が地域に馴染んでいるイメージ」と回答し、複合化のメリットを享受していることやいなげビレッジ特有のイベントによる地域住民との交流に満足していることが分かった。不満点として多機能複合拠点ならではの回答はほとんどなかったが、女性Dは「買い物バスやマルシェに他の事業所と一緒に参加したことがまだないため、何をやっているかあまりよく分からない」と回答した。

3-3. 地域イベント参加実態(表6)

勤務時間中に時間的余裕がない等の理由から参加できていない働き手もいるものの、ショートステイに勤務する女性Cは利用者とイベントを楽しんでいる。また、居住地が近いこともあり、仕事帰りに参加したこともある。

表 6 地域イベント参加実態

	女性 A	女性 B	女性 C	女性 D
参加イベント名	年 2 回のデポ一祭り	デポ一祭りや周年祭り	「虹と風のマルシェ」のキャンドルナイト	なし
参加回数	数回(勤務時間内)	数回(勤務時間内)	1 回(仕事帰りに個人的に)	なし
参加又は不参加理由	いなげビレッジ全体のイベント(マルシェ)は、シフトに入っているため日にちが合わない	同じ職場の担当に任せている/シフトに入っている	キャンドルナイトは 2 階からでも見えるため、勤務中に利用者と一緒に眺めることがある	時間的余裕がなく、難しい

3-4. 働き手による地域活動に関する展望

ヒアリング調査により得られた多機能複合拠点に関する意見を表にまとめた(表 7)。働き手は多機能複合拠点における特色ある活動を地域に普及させ、それにより地域に主体性を持たせる意欲があるといえる。

表 7 地域活動に関する展望

多機能複合拠点に関する意見	ヒアリング調査結果
	サロン等の活動が、地域の人の自主性をサポートする形になっていくと良い(女性 D)
	周辺住民へのボランティア講座を拠点で開催し、実際に熊本地震のボランティアにも行ったので、利用者でなくても地域に関心を持つ人が増えると良い(女性 C)

3-5. 働き手からみた複合化の利点

福祉分野に所属する女性 C、D は他の事業所とのコミュニケーションによる安心感や視野の広がりなどに複合メリットの実感があった(表 8)。

3-6. 働き手からみた複合化による欠点

働き手からみた複合化の欠点として、利用者以外からの事業概要のわかりづらさという事業運営面の問題点も挙げられた(表 8)。

表 8 複合化の利点・欠点

	複合化の利点	複合化の欠点
女性 A	他の職場の利用が少ないのであまり感じない	特になし
女性 B	近隣の高齢者にとっては色々そろって便利だし、買い物バスやイベントもあるので良いと思う	利用していない人にとって事業概要がわかりづらい
女性 C	・ デイサービスからショートステイに移ってくる利用者の情報を先に聞ける ・ 退勤時間が被った同期と事務所であうと、互いの状況を聞けるので安心感がある ・ 他の事業所の考え方がわかり、視野が広がる	特になし
女性 D	・ 医療との連携 ・ 他の事業所(訪問看護)との気軽な相談ができる	直接関わりがないと事業内容が分からない

3-7. 複合施設利用実態

ヒアリング調査より仕事終わりに診療所またはスーパーを利用されていることが明らかとなった(表 9)。

表 9 複合施設利用実態

	女性 A	女性 B	女性 C	女性 D
利用サービス	診療所/デポ一園生	診療所	診療所	デポ一園生
利用時	検診やインフルエンザ注射の時/仕事帰り(デポ一園生)	仕事帰り(風邪気味の時)	インフルエンザ注射/健康診断/仕事帰り(風邪気味の時)	仕事帰り

4. 雇用者からみた多機能複合拠点の特徴

4-1. 雇用者からみた複合化の利点

雇用者は、機能複合化により他のサービス利用者にとってスーパーを複合利用してもらえることや、スーパー利用を呼び掛けることができること、他の職場に気軽に相談できることの安心感等を複合化の利点と捉えている(表 10)。特に医療・福祉が複合しているため、同一利用者に継続してサービス提供ができることを利点と捉えており、医療・福祉の複合は経営の安定化につながると考えられる。

4-2. 事業運営上の問題点・課題

福祉人材不足と、福祉施設の複合利用が周知されていないことを問題点とし、拠点内での事業相互理解が課題であった(表 11)。

表 10 事業運営上の利点

	事業運営上の利点	内容
①	小売店舗の複合利用	別の企画で訪れた人が後で利用してくれる(デポ一園生)
②	医療・福祉の複合	ショートステイを利用していた方がターミナル期で自宅に帰ることもできなくなり、サ高住に入居した。施設を変えることなく利用者を看取ることができたため、その家族にとっての安心感にもなった。(施設代表者)
③	他の職場との連携	分からないことがあったらすぐに相談できる/安心感がある(定期巡回ステーション・訪問介護ステーション・デイサービス・診療所)

表 11 事業運営上の問題点・課題

	事業運営上の問題点・課題	内容
①	福祉人材不足	・ 福祉人材の不足により介護の依頼を受けきれない ・ 募集をしても人が来ないので、ヘルパーや契約社員の人件費を上げていて経費がかかっている(施設代表者)
②	事業所間の関わりによる事業相互理解	他の職場にもっと事業や児童デイの利用者について知ってもらいたい(児童デイ) スキルアップのためにも、従業員に拠点全体のことや自分の事業以外のことにも広く目を向けてほしい(訪問看護)
③	福祉施設の複合利用の周知	複合施設(特に福祉施設同士)の複合利用の仕方がまだ地域に理解されていない(ショートステイ)

5. 導入 1 年後と導入 5 年後の特徴の比較(表 12)

5-1. 複合化の利点に関する比較

導入 1 年後・5 年後ともに「ライフステージに応じた利用」や「複数サービスを利用」してもらうことで利用者を支えられること等が利点として挙げられた²⁾。

5-2. 今後の課題に関する比較

ほとんどの課題が 1 年後・5 年後に共通していた²⁾。しかしその対策として導入 5 年後は、事業代表者ごとにラジオ体操やサロン等の活動を通じて顔なじみになった地域住民に拠点の事業概要を説明する機会を設けている。

表 12 導入 1 年後と導入 5 年後の特徴の比較

	導入 1 年後 ²⁾	導入 5 年後
利点	・ ライフステージの段階ごとに必要なものが揃っている ・ 得意分野が異なり、やれることが多くなった ・ 複合利用による利用者の増加 など	・ 連携により効率よく事業を行え、経費を削減できる など ・ 他の事業所に気軽に相談できることの安心感 など
課題	・ 生協店舗以外も生協に加入しないと利用できないと誤解されている ・ イベント以外に事業所間で連携することがない ・ 複合拠点が説明しづらく、広報が難しい など ・ 価値観が違う部分もあり、一つのことを決めるのに時間がかかる	・ 福祉人材不足 ・ 福祉施設の複合利用の周知されていない ・ 拠点内での事業相互理解が必要

6. まとめ-多機能複合拠点の有用性と課題-

本研究により多機能複合拠点の導入は①小売店舗が成立しやすい②医療と福祉の複合化により、経営の安定化につながる③郊外住宅地における雇用創出につながる④働き手にとって育児や介護との両立、他の職場とのコミュニケーションといった働きやすさが得られると考えられる。一方で、複数の施設が複合していることによる①事業概要のわかりづらさを解決すること②複合利用の仕方の周知③事業所間の相互理解が課題であるとされた。

また、働き手は勤務時間等の都合上イベントへの参加は少ないものの、なかには地域とのつながりを重視する者もいた。今後高齢化が加速する郊外住宅地において住民が地域福祉等への理解・関心を深め、複合拠点で行われている地域活動に主体的に参加し、交流できるような拠点や仕組み作りが求められる。

【参考文献】

- 1) 小林史奈, 小林秀樹「多機能複合拠点の郊外団地再生における意義と課題—園生団地の生活クラブいなげビレッジ虹と風を対象に—」日本建築学会大会学術講演梗概集, 2016
- 2) 長井和音「複合拠点導入による団地住民の生活実態の変化に関する研究—千葉県園生団地を対象として—」, 2013

*千葉大学大学院工学研究科 博士前期課程

**株式会社ジェイアール東日本都市開発

***千葉大学工学部都市環境システム学科 教授・工博

*Graduate Student, Graduate School of Engineering, Chiba University

**JR East Urban Development Corporation

***Pror, Dept of Urban Environment System Faculty of Engineering, Chiba University, Dr. Eng.